日本と中国における礼儀教育の特徴と具体的な指導

―文化的、歴史的な比較研究を中心として―

発表者：　カクロ
指導先生：　押谷由夫先生

序章
Ⅰ　問題の所在
Ⅱ　研究の目的
Ⅲ　研究の方法

本論
第一章　中国と日本における礼儀教育の歴史と今日における礼儀教育の重要性
第一節　中国における礼儀の捉え方
第二節　礼儀教育の歴史
第三節　今日における礼儀教育の重要性

第二章　中国と日本の学校の教育課程の中での礼儀教育の内容及び実際の指導
第一節　中国と日本の指導要領の内容とその分析
第二節　課程の内容
第三節　実際の指導

第三章　中国と日本の小学生の礼儀に対する意識と行動の実態とその考察
第一節　先行研究
第二節　アンケート調査
第三節　単純集計の結果と考察
第四節　因子分析の結果と分析
第五節　重回帰分析の結果と分析

第四章　中国と日本の特徴をふまえた礼儀教育のあり方と今後の課題
第一節　中国の礼儀教育のあり方
第二節　まとめと今後の課題

Ⅰ　問題の所在（研究の動機）

近年、中国は競争社会に応じた様々な改革を行い、大きな成果をあげている。しかし、中国では、大きな問題も持っている。それは、道徳観の確立と経済の発展の歩調が不一致ということである。道徳教育の面の欠如がますます目立ってきて、特に、社会全体を見ると、中華民族のよき伝統である「礼儀」が意識されていない。そのため、様々な社会問題が起こって、中国の道徳心が世界中で疑われている。

一方、戦後数十年を経ち、日本は産業、経済、社会構造など、あらゆる面に大きな改革を遂げて、国全体の経済水準が世界のトップレベルに立っている。しかし、日本では道徳観が依然として確立されているように思われる。日本の学校における道徳教育を見ると、経済が大きく発展した時に、道徳の時間が設置された。それ以後、文部科学省による『学習指導要領』の改訂などを通し、道徳教育の充実を図り、自分の生き方について考え、「未来を拓く主体性のある日本人」を育てることを目指している。特に、今回の東日本大震災で見せた日本人の礼儀正しい姿によって、日本の道徳教育の優れている所が更に世界中に注目されている。

そこで、中国と日本で行われる道徳教育の中で礼儀に関する部分について分析したい。日本の礼儀教育の取り組みと中国の現状を比較しながら、中国の礼儀教育の問題点を改善し、日中両国の子ども及び社会がより一層道徳性を持つことができるようになるにはどうすればよいのかを分析しようと思っている。

Ⅱ　研究の目的

１、中国と日本における礼儀教育の歴史と変化を明らかにする。

２、中国と日本の学校における道徳教育の中での礼儀教育について、教育課程を分析することから明らかにする。

３、中国と日本の小学生の礼儀に対する意識について実態を明らかにする。

４、実態調査を通して中国と日本の礼儀教育の異同を比較し、問題点について道徳教育の視点から分析し、道徳教育と礼儀教育を関連付けた指導のあり方について論究する。

５、上記の論究を元に、道徳教育と関わらせた礼儀教育のあり方について具体的な提案を行う。特に、日本の礼儀教育の取り組みと中国の現状を比較しながら中国の礼儀教育の問題点の改善について具体的に提案する。

Ⅲ　研究の方法

1、先行研究（文献研究）

2、現地調査（アンケート調査、参与調査）

本論

第一章　中国と日本における礼儀教育の歴史と今日における礼儀教育の重要性

中国と日本の礼儀教育の歴史を概観して、日中両国の伝統的な礼儀教育の内容を把握することができた。中国は昔から礼儀教育を重視する優良伝統がある。今から約３千年前の西周時期、礼儀は学校教育や社会教育の重要内容として習い始めた。特に、春秋時期、孔子は「礼」を儒教の重要内容として、世の中に広めていた。以降、礼儀は統治階級が支配者の地位を保つ重要な手段として、封建社会を始終貫いている。また、古代の中国では、児童期の礼儀教育が重視されており、代表となる南宋の大学者の朱熹の『童蒙須知』では、外見や姿態、話し方、行動の表現から説明し、児童が習うべき内容を記載している。

しかし、この優れた伝統をますます盛んにすることができなかった。「文化大革命」の十年の間に礼儀文化がひどく破壊されており、礼儀教育が停滞していた。経済発展とともに、今日に至って中国政府は様々な教育改革を行い、児童を全面的に発展させるために、「資質教育」を提唱している。また、児童生徒の道徳的修養を高め、礼儀教育を推し進めるために『中小学校文明礼儀教育指導綱要』を頒布した。

一方、日本では、礼儀作法が文化として成立し、定着したのは、武士が支配者となった時期である。「文武兼備」の武士を育つために、各地の藩は藩校を設け、武芸のほかに、礼法などの道徳的修養と結びついた文の教育を行った。そして、庶民を対象とした寺子屋では、習字、算数などの基礎知識や技術知識などのほかに、倫理、道徳の教育も行い、児童の品格と礼儀正しい習慣の養成に力を入れた。このような各階層が共に行った礼儀教育は、日本の民族全体が礼儀正しい伝統を受け継ぐ大きな要因だと考える。

第二章　中国と日本の学校の教育課程の中での礼儀教育の内容及び実際の指導

１．指導要領の内容とその比較

両国の小学校で実行されている指導要領「課程標準」と「学習指導要領」を比較してみたところ、中国の「課程標準」は昔の「教育大綱」より大きく進歩があって、礼儀教育と子どもの生活の連携を重視するようになっているが、まだ具体的な指導に傾く傾向があり、内面的な育ちが足りないと考えられる。一方、日本の礼儀教育は相手への尊重や思いやりから深め、具体的な指導より、実践力の育成を重視し、礼儀の知識より、礼儀の大切さを理解させることに重点を置くことが分かった。子どもたちが自ら礼儀正しい振る舞いをとる力を育つことの点では、中国より一歩先んじると思う。

両国が現在行われている指導要領の中で礼儀に関する内容項目を比較してみるところ、礼儀の学びとしては、日本の低学年では「あいさつ」がその主たるものであり、「言葉遣い、動作などに心掛けて」、他人を「明るく接する」。礼儀の心は相手を尊重し、相手いに対して敬愛する気持ちから生まれ、そして言葉や動作によって礼儀正しい態度が表現されることを示している。中国の低学年では「礼儀を重んじ、マナーを守り、礼儀正しい行動をとる」。三つの内容は全部礼儀の価値を表すが、低学年の子どもにとっては、少し抽象的だと考えている。礼儀の態度を養うには、まず相手に対する尊重と敬愛の念をもって、他人と明るく接する中で、気持ちのよさを感じてから徐々に深めていくのが合理的だと考える。

また、中学年と高学年において、日本は「礼儀の大切さを知り」と記述し、中国は「基本的な礼儀の常識を知り」と記述した。日本では「大切さ」ということばを使っていて、つまり日常生活において礼儀の重要性を強調している。人が社会生活を営もうとする時に、よい人間関係を築くには、快適な応対をしなければならない。そのために礼儀が必要とされている。さらに、「真心をもって接する」と述べ、相手の心情を自分に置き換え、相手への思いやりから自然に礼儀正しい言動を考えることができるようになり、礼儀の意義についても徐々に理解できるようになっていく、と考えられる。それに対し、中国では「知識」だけを強調し、従来と比べては大きく進歩したが、まだ児童の内面の育ちが足りなくて、日常生活との融合は少し不足感がある。知識だけを把握して、他人とのかかわりに実現しないと礼儀の本当の意味ではない。日本と比較してみると、中国はまだ大きな改善の必要があると考えられる。

２．道徳課程の内容の比較

中国の教科書の内容は児童の日常ベースにして設けられている。児童の実生活の各方面の知識を含んで、道徳的養成をしながら、生活スキルを身につける総合的な内容が多くなり、児童の全面的な発展を目指している。しかし、礼儀の単独の単元がないし、礼儀に関する内容も少ない。礼儀をねらいとして取り上げるために、教師の能力が求められている。一方、日本の道徳の時間においては、副読本を活用できるため、教師が礼儀を扱う資料を使って指導することができ、礼儀に焦点をあわせるのが容易である。児童にとってもはっきり理解することができる。

３．実際の指導の比較

（1）中国の授業の最大の特徴は、授業中秩序の良さだと考えられる。授業中私語、勝手な行動やほかの児童の邪魔になる行為をする児童がほとんどいない。児童は教師が指示したことをきちんと従い、教師の質問に対して積極的に考えて答える。授業は主に質問のやりとりで展開され、昔のように教師が一方的な教え込み・詰め込み教育方法より大部進歩していると感じられた。

また、都市と地方の学校に行われる授業はいくつかの異同点がある。授業の補助手段として、都市と地方はともにパワーポイントを利用することになっている。しかし、地方ではパワーポイントはすべて教師が考えて作って、教科書の文章と写真をそのまま載せる場合が多いのに対し、都市のパワーポイントは事前に教師と児童がともに考えたため、内容がより豊富で、教科書以外の文章や写真を展示するほかに、授業中のグループ討論や模擬活動などの授業進行の内容も載せていた。地方のパワーポイントは教師が授業内容を説明するときの補助資料となり、都市のパワーポイントは教師が授業を行うときのお導きとなり、授業進行の一環としてより密接に授業と融合させることが感じられた。

児童の生活環境や生活水準からみると、大都市の子どもたちは生活経験が豊富で、新しいものを理解しやすく、先進的な理念に他の

地域の子どもより早く出会うことができる。一方、田舎、特に貧しい農村地域では、生活水準が大都市より低いので、道徳への関心が少なく、人々の素養向上が待たれる。そのため、まずは児童を導き、現代社会の陋習を認識させ、改めさせる。教科書の内容そのまま授業で運用するではなく、子どもの実際の状況を十分配慮して、より身近で、子どもの生活範囲でよく見られることを代わったほうがより適切で理解しやすく、共感を得られるかもしれない。

教師は、授業全過程において、始終笑顔で、優しい声に抑揚をつけて間を持たせ、丁寧で分かりやすい言葉で授業を行った。児童の答えを受け止めたり、褒めたりしていて、答えられないときにも児童を励まして根気よく導いた。しかし、教育方法が変わっても、教師が自分の正しいと思う価値観で児童を導く傾向が見られ、既成の価値観を押し付ける行動の指導が多く、児童の内面の育ちが弱くなるかもしれない。地方の教師は児童に質問した内容は「はい」か「いいえ」で答えられるものが多くて、一斉回答を求め、児童全員に「そうですよね」と尋ねる場合も多く見られた一方、都市の教師が自ら答えを導くのではなく授業の中で子どもたちが自らの意見を交流し合い、異なる考えをぶつけ合わせる。児童それぞれの回答を確認を行って、グループを分けて討論した後でもすべてのグループの答えを聞いた後結論を出した。

児童は、まず、授業中に勝手にしゃべったり、行動をとったりする児童がいなかった。みんな姿勢正しく座って、問題を答えるときは手をあげて、指名されたら立ち上がって答えた。他の人が答えるときに静かにまじめに聞いてたが、地方の児童は普通に前に向いて聞いたのに対して、都市の児童は発言する人に向いて聞いたことが違うところである。また、教師の質問に対して都市の児童が積極に手をあげて答えたし、答えるときにとてもきれいな言葉と標準な文法を使ったことが地方の児童より良いところである。地方の児童の発言が素朴で予想通りな答えが多く、想像力や思考力をもっと鍛える必要があると思う。

（2）日本の授業について

日本の道徳の授業は、教師は明るくて生き生きな雰囲気を作り、優しい口調で児童を接する。板書をする時に、授業の重要な場面の絵や、キーワードとキーセンテンスが記入された鮮やかな張り紙を使い、児童の興味を引く。児童たちの考えの違いを理解し、一人ひとりの発言を訂正しなくて、ありのまま受け止める。児童の答えに対して、ただ簡単に「そう」と返事したり、頷いたりするだけではなく、繰りかえりたり、詳しく説明して「そうだね」と確認する行動が多い。児童の発言は他人の発言とほぼ同じく、または授業が提唱している価値がかなり離れても、教師はその児童を否定する場面が見られなかった。正しいかどうかの判断を下さらなくて、自分の意思を強引に押し付けようとしない。児童が発言するときに、教師は教壇から見るのではなく、児童に近づいて、体を低くしている状態で耳を傾ける。目上の立場ではなく、明朗快活で児童達に寄り添い、共に歩く教師像が感じられる。

児童たちは、授業が始まる前に、義務的ではなく、明るくて感情を込めるあいさつをするのが感じられる。教師が資料を読むときに、まじめに聴く。教師の質問に対して色々な視点から考え、積極的に教師の質問を答える。答えようとする時に「はい」と言って手をあげ、指名されたら立って答える。他人が発言するときに、発言をする子を向いて聴く。また、授業中教師と友達のような気軽で親しい口調でのやりとりをすることから、教師が児童に対する慈愛、寛容な態度と民主的な授業が伺える。

第三章　中国と日本の小学生の礼儀に対する意識と行動の実態とその考察

日本と中国の小学校で実施されたアンケートの結果について、中国の子どもたちの礼儀に対する意識が日本の子どもより高いが、親に口答えをしたり、列に割り込んだりしたことがあっても、自分が礼儀正しいと判断した中国の子どもたちが多数いるので、自分に対して過大評価をした可能性が高いと考えられる。そのため、正確性が保証できない。しかし、SPSS の分析によっていくつかの特徴が見られた。

中国では、自分が礼儀正しい子どもは、学校にある公有財産を大切に取り扱う意識が強い。また、自ら礼儀正しい行動を取ることが自分が礼儀正しい証拠だと思う子どもが多い。これは中国の学校教育で提唱された理想的価値観と道徳的行動への指導が多いことの影響だと考えられる。日本では、礼儀正しくないことをする子どもたち、つまりよくルール違反の子どもたちがわりに学校の中で礼儀正しい行動をする。それは、他人の評価を重視することと関係を持っていることが推察される。学校空間では、自分が属する集団生活であり、自分の行動が常に見られたり、評価されたりするので、自分を良く見せるために、ルール違反と正反対な行動をすると考えられる。また、学校における礼儀教育が相手の気持ちと人間関係に重点を置いている。それを原因で、日本の子どもたちが他者からの評価を踏まえ、自己評価をしていたことが考えられる。

第四章　中国と日本の特徴をふまえた礼儀教育のあり方と今後の課題

１．中国の礼儀教育のあり方

以上の分析と調査を踏まえて、日本の経験を導入し、中国の文化を生かして、中国の小学校における礼儀教育に三つの提案を挙げる：中国の古代の礼儀教育から学ぶ；相手に対する気持ちから学ぶ；日常生活における習慣の育成。この三つの視点から、中国の礼儀教育の改善を図る。

(1) 古代の礼儀教育から学ぶ

古代の礼儀作法は時代遅れのものであり、現代社会の要求にふさわしくないという観念を持っている人が大勢いる。しかしそうではない。古代では、礼儀は国の安定を守る重要な役割を持っていたので、古人が礼儀を身につけたからこそ、中華民族の五千年の文明歴史が続けることができたのである。そのため、古代の礼儀を見習うべきだと考える。

古代の礼儀作法といえば、周代から「冠礼」という男性の成人祝いがあり、二十歳になる日に祖先の霊を祭る場所の宗廟で大人の冠と衣装を長老に着てもらい、社会を出る資格を認められる。この日から男性は子どもの甘える考えを捨て、社会の責任をきちんと負わなければならない。日本でも「成人式」が毎年行われ、その他の国では日本のように成人年齢に達した事を全国一斉に祝うような祭典を行う国はほとんどないということである。「冠礼」の起源国としての中国では、儀式を行わなくても、内容や知識を教えることにより、子どもたちに成人になる時の感動と責任を共感させたら、成長に良い影響を与えるのであろう。

(2) 相手に対する気持ちから学ぶ

礼儀は、「思いやりや親切、信頼、感謝、敬愛、といった心性・心情を、言語的・非言語的に謙虚（慎み）の形で表出したコミュニケーション様式と言える」[1)]。言葉には人を不快にしたり、うれしい気分にしたりするパワーがあることを知り、相手の気持ちを考えて言葉を発することの大切さに気づくようにする。そして、相手への配慮から礼儀正しい行為をすることによって、自分も相手も気持ちよく過ごせるようになる。つまり、礼儀は相手を大切にしていると伝えるものである。

『品徳と生活』第一単元「私は入学した」の第 2 主題「学校のベルが鳴った」の中で、

「他人が発言をする時に、あなたはどうするべきだ？」という質問に対して、教師用教科書では、「他人が発言するときに、まじめに聞くべきだ。他人の考えを知り、勉強になるとともに、礼儀正しい表現でもある」と述べている。場面の説明にも、「正しいやり方」「良い行動」「勉強の役に立つ」としか記入していないので、子どもたちに「どうして他人の発言をよく聞くことは礼儀正しいことだ？」ということを解説していない。つまり、具体的な行動の指導があるけれど、実践力への配慮が足りない。

他人が発言をする時に、聞かないまま自分のことをしたり、しゃべったりすると、相手が困ったり恥ずかしくなったりする。自分が失礼なことをすることによって、相手が不快な気持ちになってしまう。もし静かにきいてあげたら、相手が自分からの親切な行為を感じられるし、自分が相手に気持ちよく発言する環境を作ってあげることによって、自分も相手も互いに尊重しながら達成感が感じられる。他人の立場を立って、他人の気持ちを考えてみよう。きっと子どもたちが礼儀の大切がを感じられるのであろう。

(3) 日常生活における習慣の育成

ここで、あいさつを重要な学習内容として挙げる。日本では、学校教育における礼儀の最初の指導はあいさつであり、日常生活においてもあいさつは礼儀の極めて重要な内容である。一方、中国では、あいさつが習慣化されていない。社会を出て、仕事場であいさつをする大人が多いが、学校や日常生活であいさつをする子どもが少ない。学校教育においても、あいさつを重視していない。

「あいさつコミュニケーションの第一歩。豊かな人間関係をつくるためにもあいさつが上手にできるようにさせたい」という。つまり、あいさつは相手の心を開くものであり、小さい頃からあいさつの習慣を身につけたら、礼儀への理解もしやすくなると思う。

しかし、中国の子どもたちにとっては、あいさつをする習慣がないし、恥ずかしくなってあいさつができなくなく場合があると想定できるので、きちんとあいさつの大切さを説明するべきだと思う。だれとでもあいさつするということが自分にとっては気持ちいいことであり、あいさつされたら自分もうれしくなるので、あいさつがすばらしいことであると説明してあげると、気持ちよく受け入れると思う。

学校であいさつを習慣化するために、まず子どもたちにあいさつすると気分がよいことを確かめさせる。隣同士や友達からはじまり、あいさつし合う。暖かい気持ちを込めてあいさつすれば、仲良くできるという考えを理解させる。また、中国では、「いただきます」「行ってきます」「ただいま」などの既定されたあいさつ言葉なないので、その代わりに、たとえば家を出たときに家族に一言をかければ良いと思う。中国では、学校の先生は権威がある存在なので、自ら子どもたちにあいさつする習慣がない。もし先生が自らの行動で模範を示し、素晴らしいあいさつできる環境を作ってあげたら、子どもたちも恥ずかしがらなくあいさつできるようになると考える。

２．今後の課題

日本と中国の道徳教育は共に児童の個性、全面的な人格の完成に関心を注ぎ、重視するようになってきた。しかし、指摘できる問題もたくさん存在している。日本では、礼儀教育があいさつに偏る傾向が指摘されている；中国では、礼儀教育への重視が足りなくて、2010 年に「中小学校文明礼儀教育指導綱要」が公布されたものの、学校現場で重視されていなくて、知らない教師もたくさんいる。

これから、礼儀教育の改善に向けて、昔の伝統的な礼儀教育の理念を導入し、実践力と実際の行動力をバランスよく育つことができる礼儀教育を実現していくことが、両国のこれからの課題として考えられるだろう。